令和６年２月12日(月)奈良新聞より抜粋

「残念」地元に衝撃

苦悩する短大 募集停止の余波 ○…下

大学側「学ぶ機会守る」、跡地利用も焦点

奈良佐保短大学(奈良市鹿野園町)が2025年度以降の学生募集停止を発表してから約1カ月余り。在校生や大学関係者のほか、卒業生や地域住民にまで波紋が広がる。一方で、約2年後に迫る閉校後のキャンパス跡地利用について検討が始まった。長年にわたり、地域に根差してきた短大の模索は続く。

(谷村 隆城)

▽動揺広がる

同短大は昨年12月23日の理事会で募集停止を決断する。同月27日には文部科学省に報告後、学生たちを集めて報告した。

同短大1年生の女子生徒(19)は「募集停止はびっくりした。少人数が気に入り入学したのに」と動揺を隠し切れない様子。

同大学入試・広報センターによると、今春の入学生や在学生への教育や進路支援などは、これまで同様に全力を挙げて取り組む。卒業後の各種証明書の発行などの対応も、支障ない体制を整えるという。

また、法人が運営する付属生駒幼稚園(生駒市)、付属倉敷幼稚園(岡山県倉敷市)、付属河内長野幼稚園(大阪府河内長野市)の3園も継続の方針を示している。

▽惜しむ声

募集停止の一報は、在籍する学生のほか、地域住民らにも衝撃が走った。

短大向かい側の近くには、県護国神社が鎮座する。宮田康弘宮司は「短大は地域の核といえる。にぎわいがなくなる。残念でならない」と閉校を惜しむ。

キャンパス内には一般市民も利用できる学食「レストラン鹿野園」がある。県認定の「眺望のいいレストラン」にも選ばれ、学生のほか多くの地域住民も利用する。

地域の子どもたちがダンスなどを楽しむ奈良佐保短期大学の「こどもフェスタ」＝昨年11月18日、奈良市鹿野園町

また、奈良市の委託を受けている子育て支援広場「ゆめの丘SAHO(さほ)」も開放されている。同大学によると、レストラン、子育て支援広場ともに閉校までの2年間は運営を続ける方針だ。

ほかにも、同大学と地域住民とのつながりは深く、毎年秋にはキャンパス内を開放して恒例の「こどもフェスタ」を開催している。約200人の親子が参加。キャンパスのほぼ全館を使って、ダンスや劇などさまざまな催しが開かれるが、閉校以降の開催は未定。

▽白紙の跡地利用

同短大の総敷地面積は3万5000平方㍍。校舎や講堂、食堂、体育館施設などが点在する。

閉校後の跡地利用については「白紙の状態」。先月中旬、同短大の同窓会「あせび会」の役員会が開かれ、大学側から出席者に募集停止の説明があった。

卒業生らからは閉校を惜しむ声とともに、跡地利用についての提案があった。

同大学によると、福祉施設の新設などを検討しているという。

同短大の池内ますみ学長は「まずは学生や新入学生の学びの機会を守る。地域に根差してきた大学なので、しっかりと今後の大学運営や跡地の活用を検討していく」と話す。＝おわり＝

記者の目 県内の教育に大損失

開学から90年以上の歴史を持つ奈良佐保短大の募集停止に驚きの声が上がる一方で、納得する声も多かった。特に県内の高校や大学関係者などに取材を進めると「短大離れ」が顕著であることが分かった。

大きな要因は2020年度から始まった高等教育の修学支援新制度。金銭的理由で諦めていた高校生に4年制大学への進学を強く後押ししている。今後も短大の苦戦は続きそうで、他校との差別化や特殊性などが求められる。

2年後には奈良佐保短大が閉校する。同短大は海外からの留学生やセカンドキャリアを志す人の受け皿にもなってきた。同短大の閉校は県内の教育にとって大きな損失ともいえる。

また長年にわたって地元に根差してきただけあって、跡地利用については地域住民の意見を反映させるべきだろう。

(谷村隆城)